

双六絵

十寸見東洲筆

『拾遺和歌集』に収められる和歌三十八首に、歌に詠まれる景物などを描いた絵双六。金箔と美しい色彩が施された、おめでたい気分があふれる双六です。現在よく知られている、サイコロの振り出た目の数だけ順路どおりにコマを進める双六とは違い、出た目が示す和歌が書かれたマスに飛びながら上がりを目指す「飛び双六」の形式です。雅な和歌と美しい絵を味わいながら、当時の人たちと同じように楽しんでください。

〔用意する物〕

- 1 双六（左の絵を含む四枚の絵を余白を残して切り取り、余白をのりしろにして貼り合せてお使いください。完成図は双六ガイドの図を参照してください。）
- 2 サイコロ（付属の展開図を線に沿って切り取り、組み立ててのりなどで貼ってお使いください。厚紙などに貼ってから組み立てると、頑丈になります。）
- 3 コマ（おはじきなど）

〔遊び方〕

スタートは右下の「ふりはじめ」のマスです。サイコロを振り、出たマークの下に書いてある文字が、次のマスの初句（最初の五文字）です。その初句が書いてあるマスを探しコマを進めましょう。

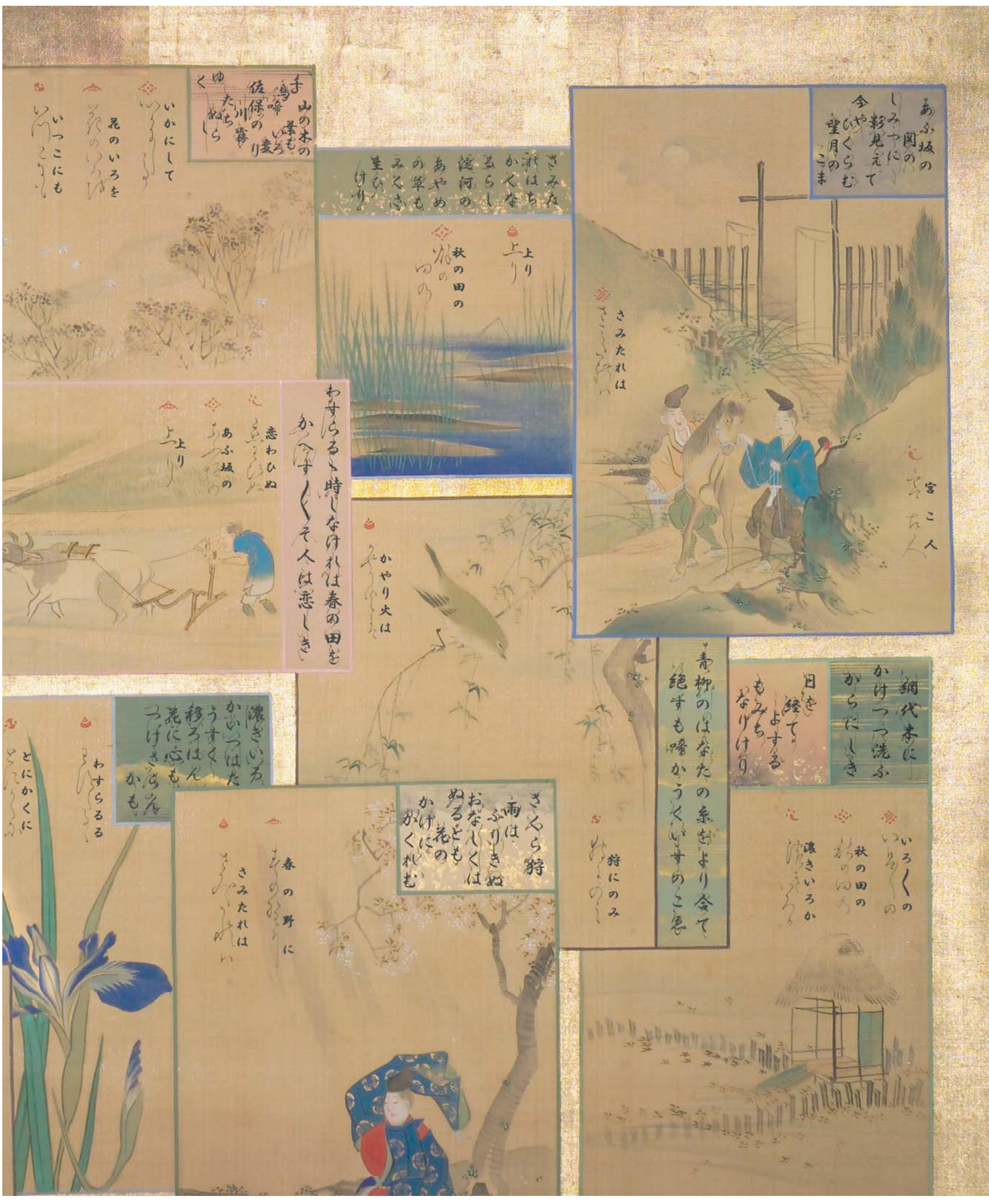
（例）ふりはじめで の目が出たします。 の下には『宮こ人』とあるので、次のマスの歌は『宮こ人』からはじまる歌になります。探してみると、すぐ上の鳥がとんでいる絵のマスの右端に『宮こ人』からはじまる歌が書いてあるので、このマスに進むことができます。

「ふりはじめ」の次のマスからは、マークと和歌の初句がたとえば二つしか書かれていないところがあります。そのマスでは、そこに書かれたマーク以外のサイコロの目が出たときは、次に進むことができず、次の人の番になります。

順番にサイコロを振っていき、一番早く上り（ゴール）にたどりつけた人の勝ちです。

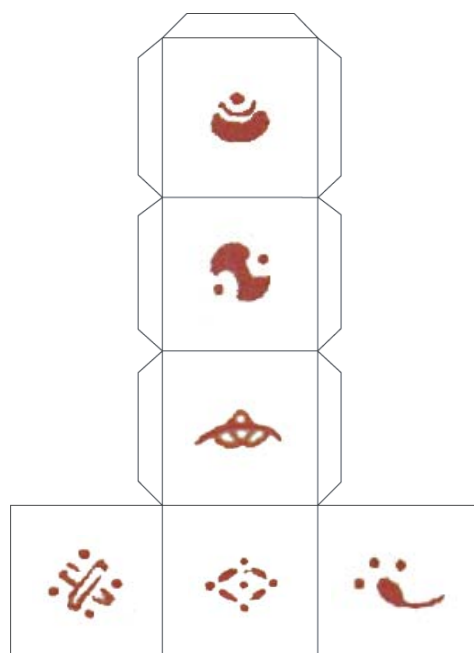
誰がリードしているのかわからないのが飛び双六のおもしろさ。

さあみんなで作ってみましょう！



「サイコロの文様について」

サイコロの目に数字の代わりに描かれた文様は、吉祥文（おめでたい文様）の一つ、宝尽し文の中に描かれる、縁起の良い宝物です。



① 宝珠 望んだ物を思うままに出すことができるという不思議な珠、宝珠。

② 分銅 おたまじやくしみたいな形ですがこれも大事な宝物。外国からやつてきたクローブという香辛料のことで、いい香りと希少価値から珍重がられました。

③ 丁子 ありがたいお経が書かれた巻き物。昔の巻き物は知識徳義の宝庫とされ、とても大切にされました。

④ 宝巻 七宝という文様で、元は仏教における七つの宝を文様にしたもの。身に付けると姿が見えなくなってしまうと言われる隠れ笠。

⑤ 七宝 七宝という文様で、元は仏教における七つの宝を文様にしたもの。身に付けると姿が見えなくなってしまうと言われる隠れ笠。

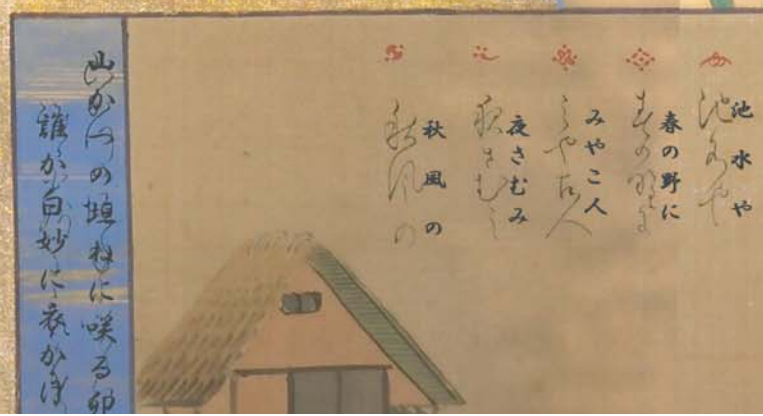
⑥ 隠れ笠 身に付けると姿が見えなくなってしまうと言われる隠れ笠。

これら縁起の良い文様をうまく当てはめて、サイコロの1～6に見立てているようです。サイコロ一つにも、当時の人のこだわりが感じられます。なお、説明に付した①～⑥の数字が、その文様が表わす数字です。お手持ちのサイコロを使っても遊ぶことができます。

これら縁起の良い文様をうまく当てはめて、サイコロの1～6に見立てているようです。サイコロ一つにも、当時の人のこだわりが感じられます。なお、説明に付した①～⑥の数字が、その文様が表わす数字です。お手持ちのサイコロを使っても遊ぶことができます。

これら縁起の良い文様をうまく当てはめて、サイコロの1～6に見立てているようです。サイコロ一つにも、当時の人のこだわりが感じられます。なお、説明に付した①～⑥の数字が、その文様が表わす数字です。お手持ちのサイコロを使っても遊ぶことができます。







いづれの
なまの葉
大井川
もみぢ
みぢや



琴のねに
しけること

春の
あさる
あたりか
人に



玉川に
常よりも
池水や



句のきほ
そふとも
色うめの花
あたに
ちらすな



いづくにも
深きいろか
いかにし
いそぎ
かひながけり



いづくにも
深きいろか
いかにし
いそぎ
かひながけり



いづくにも
深きいろか
いかにし
いそぎ
かひながけり



いづくにも
深きいろか
いかにし
いそぎ
かひながけり



いづくにも
深きいろか
いかにし
いそぎ
かひながけり



いづくにも
深きいろか
いかにし
いそぎ
かひながけり

いづくにも
深きいろか
いかにし
いそぎ
かひながけり



いづくにも
深きいろか
いかにし
いそぎ
かひながけり



いづくにも
深きいろか
いかにし
いそぎ
かひながけり

双六ガイド



上の双六のマス内の番号と左記の和歌の番号が対応しています。
サイコロの目の下に和歌の最初の句が記されています。
その歌のあるマスを探す際に、ご参照ください

24、26、29、36、のマスには、「上り」の目があります。
ゴールまであと一步となります。

- 1 子日する 野辺に小松の なかりせば 千世のためしに 何をひかまし
- 2 春の野に あさるきぎすの 妻ごひに おのがありかを 人にしれつつ
- 3 とにかくに 物は思はず 飛弾匠 打墨縄の ただひとすぢに
- 4 いづくにも 咲はすらめど わがやどの やまとなでしこ だれに見せまし
- 5 玉河に さらす手づくり さらさらに むかしの人の こひしきやなぞ
- 6 むらさきの 色しこければ 藤の花 松のみどりも うつろひにけり
- 7 しげること まこものおふる 淀のには 露のやどりを 人ぞかりける
- 8 まねくとて たちもとまらぬ 秋ゆへに あはれかたよる 花すすきかな
- 9 琴の音に みねの松風 かよふらし いづれのをよりしらべそ(め)けむ
- 10 夜をさむみ ねさめてきけば 鴛ぞ啼く 拂ひもあへず 霜やおくらむ
- 11 いづこにも 草の枕を 鈴むしの ここを旅とは 思はざらん
- 12 いかにして けふをくらさむ こゆるぎの いそぎ出ても かひなかりけり
- 13 匂ひをば 風にそふとも うめの花 色さへあやな あだにちらすな
- 14 いろいろの 木の葉ながるる 大井川 しもはかつらのみちとやみむ
- 15 みわたせば まつのはしろき よしの山 いくよつもれる 雪にか有けん
- 16 君こずは 誰にみせまし わが宿の 垣ねに咲る 朝がほのはな
- 17 宮こ人 寝で待らめや 郭公 いまぞ山辺を 啼で出なる
- 18 恋わびぬ 音をだに啼ん 声たてて いづこなるらむ 音なしの滝
- 19 網代木に かけつつ洗ふ からにしき 日を経てよする もみぢなりけり
- 20 さくら狩 雨はふりきぬ おなじくは ぬるとも花の かけにかくれむ
- 21 濃きいろが いつはたうすく 移ろはん 花に心も つけざらんかも
- 22 山がつの 垣ねに咲る 卯の花は 誰が白妙に 衣かけしぞ
- 23 秋の田の ほの上における しらつゆの けぬべくわれは 思ほゆるかな
- 24 池水や 氷とくらむ あしがもの 夜ぶかく声の さはぐなるかな
- 25 秋風の うちふくごとに 高砂の 尾上の鹿の なかぬ日ぞなき
- 26 わすらるる 時しなれば 春の田を かへすがへすぞ人は恋しき
- 27 青柳の はなだの糸を より合て 絶ずも啼か うぐひすのこゑ
- 28 あふ坂の 関のしみづに 影見えて 今やひくらむ 望月のこま
- 29 さみだれは ちかくなるらし 淀河の あやめの草も みくさ生ひにけり
- 30 千鳥啼 佐保の川霧 たちぬらし 山の木の葉もいろ変りゆく
- 31 夜ならば 月とぞ見まし わが宿の 庭白妙に ふれるしら雪
- 32 かやり火は もの思ふ人の ころこも 夏の夜すがら したにもゆらん
- 33 鶯の 巣つくる枝を 折つれば こうはいかてか 生んとすらむ
- 34 狩にのみ 人の見ゆれば 女郎花 はなの袂ぞ つゆけかりける
- 35 花のいろを あらはにめでば あだめきぬ いさくらやみに なりてかざさむ
- 36 常よりも 照りまさるかな 山のはの 楓をわけて いづる月影
- 37 よとともに あかしのうらの 松原は 浪をのみこそ よるとしるらめ
- 38 蒲生野の 玉のを山に 住鶴の ちとせは君が 御代の数なり

- 〔巻第一 春・壬生忠岑〕
- 〔巻第一 春・大伴家持〕
- 〔巻第十五 恋五・柿本人麿〕
- 〔巻第二 夏・伊勢〕
- 〔巻第十四 恋四・よみ人知らず〕
- 〔巻第十六 雑春・よみ人知らず〕
- 〔巻第二 夏・壬生忠見〕
- 〔巻第三 秋・曾禰好忠〕
- 〔巻第八 雑上・斎宮女御〕
- 〔巻第四 冬・よみ人知らず〕
- 〔巻第三 秋・伊勢〕
- 〔巻第十四 恋四・小式命婦〕
- 〔巻第一 春・大中臣能宣〕
- 〔巻第三 秋・壬生忠岑〕
- 〔巻第四 冬・平兼盛〕
- 〔巻第三 秋・よみ人知らず〕
- 〔巻第二 夏・道綱母〕
- 〔巻第十二 恋二・よみ人知らず〕
- 〔巻第四 冬・よみ人知らず〕
- 〔巻第一 春・よみ人知らず〕
- 〔巻第七 物名・よみ人知らず〕
- 〔巻第二 夏・よみ人知らず〕
- 〔巻第十三 恋三・柿本人麿〕
- 〔巻第四 冬・橘行頼〕
- 〔巻第三 秋・よみ人知らず〕
- 〔巻第十三 恋三・紀貫之〕
- 〔巻第一 春・凡河内躬恒〕
- 〔巻第三 秋・紀貫之〕
- 〔巻第二 夏・よみ人知らず〕
- 〔巻第十二 恋二・大中臣能宣〕
- 〔巻第三 秋・壬生忠岑〕
- 〔巻第四 冬・紀貫之〕
- 〔巻第七 物名・よみ人知らず〕
- 〔巻第三 秋・紀貫之〕
- 〔巻第七 物名・よみ人知らず〕
- 〔巻第八 雑上・源為憲〕
- 〔巻第五 賀・よみ人知らず〕